

人間だから

入ってから、縁があつて同誌編集部を訪ねるようになった。この雑誌の名物編集長が長井勝一さんだった。彼は、いつでも温かく迎えてくれるので、それに甘えて入りびたるようになった。編集部
の片隅で、長井さんの仕事ぶりを眺めていて、そこから多くのことを学んだ。だから、彼は、僕に
とって編集という仕事の師匠にあたる存在なのだ。

長井さんは、マンガ文化隆盛の礎を築いた功労者だが、その人生は波乱に富んでいた。戦後、貸
本マンガ出版をはじめ、白土三平しらとさんぺいとの運命的な出会いもあり、会社も順調にいった矢先、結核
に倒れる。そして、最も病状が重いつき、医者から「眉間にタテジワがあると治らない」と言われ、
シワのばしにとセロテープを貼ってみた。医者は大笑いし、「大丈夫、君は死なないよ」と言った
という。入院中に、前代未聞のマンガ誌「ガロ」を創刊、学生中心に熱狂的に支持される。しかし、
大手がマンガ出版に本格的に参入してくると、小出版社ならではの経営の苦しさに悩まされた。

そういう長井さんの口ぐせが、「人間だから」だった。この言葉には、人間の弱さ、駄目さを知
りつくしてなお、「人間って面白いよ」と語りかけてくる優しさがある。修羅場をくぐり抜けてき
た人ならではの突き抜けた明るさとはばけた味わいがしみじみと伝わってきた。

日頃は脳天気な僕だが、それでも本作りや人間関係で行き詰まることもある。そういうとき、そつ
と「人間だから」とつぶやいてみる。すると、長井さんの人なつこい笑顔が目の前に浮かび、少
し気が楽になる。気がつくつと、歳だけは重なってきた僕だが、それなりに編集の業わざは身についたと
思う。でも、なかなか師匠である長井さんの「人間だから」の境地に達することはできそうにない。



1947年東京都生まれ。編集者、ブックコメンテーター。学生時代に「ガロ」編集部でマンガ編集を学び、70年に筑摩書房入社。『ちくま文庫』『ちくま文学の森』『ちくまプリマー新書』を企画創刊。赤瀬川原平『老人力』など数々のベストセラーを生み出す。96年よりTBS系のテレビ番組「王様のブランチ」に出版コーナーのコメンテーターとして出演、話題となる。筑摩書房顧問。主な著書に『印刷に恋して』『本』に恋して、『編集狂時代』など。